

## 平成28年度修了生 修士論文概要

**論文題目：**女性同性愛者と異性愛者によるグループ交流会が相互理解に与える影響

**氏 名：**池ノ谷 和

### 概 要

LGBへの関心は近年、世界的にも高まっており、国内でもセクシュアル・マイノリティへの関心が高まりつつあるが、LGBTを理解するための具体的な活動はあまり進んでいない。異性愛者が同性愛者について正しい知識を身に付け、直接肯定的な関わりをもつことが真の同性愛理解へ繋がると考え、本研究では女性の同性愛者と異性愛者のグループ交流会が相互理解へ与える影響について検討した。全4回のグループ・セッションを実施し、その実施前と実施後にSD法質問紙調査を行い、グループ・セッション終了後には一人30分程度の半構造化面接を行なった。女性同性愛者2名、異性愛者3名によるグループ・セッションと各メンバーのSD法質問紙、面接調査の結果から以下の見解が得られた。①各メンバーが自己理解と他者理解をグループ体験の中で同時に行なっており、これらがポジティブな体験として深まっていくことで相互理解が促進された。②自己理解・自己受容がネガティブな形で行われた場合、他者理解や相互理解はあまり促進されなかった。その背景には、レディネスが整わないうちに自己開示をしなければならないグループ構成が影響している可能性が考えられた。③同性愛への知識が深まることや偏見の低減が相互理解の重要な促進要因として考えられた。④自己理解や他者理解の深まりにはグループの安全な雰囲気の中で深い話をするための基盤が作られることが重要であることが分かった。

**論文題目：**半構成方式エンカウンター・グループ体験における心理的効果の研究  
—SD法・レジリエンス尺度を用いて—

**氏 名：**今井 美穂

### 概 要

EGの働きの一つである心理的成長に関して、その一側面としてあげられるレジリエンスは、逆境に耐え、試練を克服し、感情的・認知的・社会的に健康な精神活動を維持するのに不可欠な心理特性であり、近年の研究によりストレスの対処が影響をしていることが分かってきた。

EGを行うことでレジリエンスは高まると考えられ、そのレジリエンスと関係深いとされるストレスも捉え方が変化し、ストレスへのイメージが柔軟になると考えられるが、明らかではない。

そこで本研究では、半構成方式EGを体験することによる、レジリエンスとストレスイメージの変化と、体験したMeはEG体験の仕方によって、どのような心理的効果がみられ

るのかを検討し、以下の結果を得た。

半構成方式EG体験によるレジリエンス得点に有意な差は見られなかったが、半構成方式EG体験により自己理解が進み、Meの体験前の理想自己が下がり、過度に高くつけていたレジリエンス得点が現実的になったと推察された。半構成方式EG体験は、ストレスをよりポジティブなイメージへと変化しており、それは心理的效果に大きく関係していると推察される。

半構成方式EG体験群の4名共通に起こった心理的效果は、「自己理解、他者理解、自己と他者との深くて親密な関係」であった。4名とも14回の半構成方式EG体験を通して、その体験の仕方に関わらず、心理的效果、心理的成長が行われたと推察された。しかし、体験の仕方によって心理的效果に差が出ているといえよう。

**論文題目：**事前志向対処としてのProactive Copingの特性と有効性

—従来型の即応的対処方略との比較検討—

**氏名：**柏崎 克彦

**概要**

本研究はSchwarzer (1999) によるProactive Copingの事前志向対処としての特性を明らかにすることを目的に、Carver et al. (1989) によって作成された従来型のコーピング尺度であるCOPE (Coping Orientation to Problems Experienced) との関連の検討が行われた。女子大学生 (N=279) を対象にストレス反応とハッスルを従属変数とし、「Proactive Coping高群・Proactive Coping低群」、「COPE高群・COPE低群」を独立変数とした分散分析を行った結果、Proactive Copingはハッスルを低減させ、ストレス反応を抑制するはたらしめがあり、一方で従来型のコーピングはハッスルを低減させることはなく、様々なコーピング方略の中にはむしろストレス反応を増加させてしまうものもあることが示唆された。また、「Proactive Copingのハッスルとストレス反応への影響モデル」の共分散構造分析の結果、Proactive Copingを行うことでハッスルを低減することはできても、ストレス反応を減少させる効果はないことが示され、さらに、間接的にもストレス反応を抑制するまでには至らないことも本結果は示唆している。

**論文題目：**女子大学生におけるぬいぐるみを抱くことによる抑うつの変化

**氏名：**菊川 紗希

**概要**

本研究の目的は、女子大学生を対象にぬいぐるみ所持前後の抑うつおよび状態不安の変化を明らかにすることであった。予備調査 (N=285) にて、移行対象の有無、愛着のタイプ、抑うつ得点を調査し、実験プログラムの協力者を募集した。愛着のタイプ (The Expe-

riences in Close Relationships Inventory for The Generalized Other: ECR-GO)「恐れ型」の多さ、抑うつ得点(The Center for Epidemiologic Studies Depression Scale: CES-D)の高さより、予備調査協力者である女子大学生の危機的な状況、特定の愛着対象が不在である、もしくは、その関係が不安定である可能性が伺えた。介入研究(N=10)にて、X年Y月中の3週間、1日約15分間3条件を設定して、ぬいぐるみを抱く実験プログラムを行った。日常活動をせずにぬいぐるみを抱いていた期間の抑うつ得点および状態不安得点の平均値は、介入前より後に有意に下がる(抑うつ得点: $t=2.832$ ,  $df=9$ ,  $p<.05*$ ), また、下がる傾向(状態不安得点: $t=2.127$ ,  $df=9$ ,  $p<.1†$ )にあった。介入前後において日常活動をせずにぬいぐるみを抱くことが、抑うつおよび状態不安に影響することが示唆された。

**論文題目：**保育園建設に対する近隣住民の態度形成に及ぼす要因について  
—子どもと保護者に対する眼差しの厳しさの視点から—

**氏名：**窪田 奈央

**概要**

本研究は、子育てをしている人々に対する意見や態度に影響を及ぼす要因として、子どもに対するイメージ、子育てをする親に対する眼差しの厳しさや偏見、さらにそれらを緩和する要因などの視点から検討することを目的に行った。子どもイメージ尺度、子ども嫌悪尺度、子育てをしている親に対する眼差しの厳しさ尺度、保育園建設に対する態度変容に影響を及ぼす要因となる対策尺度を作成し、それぞれの尺度項目に加え、フェイスシートの項目、回答者の近隣に建設が予定された際の保育園建設に対する賛否態度を30歳以上の人に回答してもらった(n=210)。分析の結果、若い世代よりも年代の高い人の方が子どもに対する嫌悪感を抱いており、子育てをしている親に対する眼差しも厳しいことが考えられる。保育園建設に対する賛否態度に関しては、子どもへの嫌悪感が強かったり、子育てをしている親に対して冷たい視線を向けたりする人の方が、保育園の建設にも否定的であるといえる。保育園建設に対する態度変容に影響を及ぼす要因に関しては、子どもに対する嫌悪感や子育てをしている親に対する冷たい視線が、どの対策が地域住民の賛同を得るために役に立つかに影響を与えたと考えられる。

**論文題目：**絵本を用いたなつかしさ体験が感情に及ぼす影響について

**氏名：**齋藤 明香

**概要**

本研究は、次の2つの仮説①絵本を用いたなつかしさ体験によって、状態不安尺度の得点が下がる、②絵本を用いたなつかしさ体験によって、一般感情尺度 肯定的感情の得点

が上がる，を検討することを目的に行った。予備調査において，関東圏内のA大学に在学する女子大学生340名に対し，なつかしいと感じる絵本の有無と，その絵本の題名を調べ，そのうち協力可能と答えた9名を対象に絵本を用いた実験を行った。被験者の9名を，介入群4名，統制群5名に分けた。介入群には，予備調査時に回答してもらった「なつかしいと感じる絵本」を実際に読んでもらった。統制群には，著者が作成した「なぞり課題」に取り組んでもらった。評価尺度として，新版STAI状態-特性不安検査（状態不安尺度），一般感情尺度，懐かしさ体験尺度を実施した。その結果，懐かしさ体験尺度の「なつかしい（ $Z = -1.71, p < .10$ ）」「切ない（ $Z = -1.96, p < .05$ ）」「さみしい（ $Z = -1.96, p < .05$ ）」という項目において，介入群と統制群の間に有意な得点の差がみられた。その他の評価尺度においては，有意な差はみられなかった。よって，仮説①，仮説②は支持されなかったが，絵本を用いたなつかしさ体験は，なつかしいと感じる対象が個人によって異なること，また，「なつかしい」という感情だけでなく，「切ない」「さみしい」といった感情をもたらすことが判明した。

**論文題目：**ハーディネスを喚起する内言と困難経験および対処行動との関連

**氏名：**齋藤 悠里

**概要**

本研究では，現代の女子学生が葛藤状況に対してどのような対処行動を取っているのか，またそれにはどのようなハーディネスを喚起させる内言がどのような影響を及ぼすかを明らかにすることを目的とした。調査対象者は，関東圏内のX女子大学182名であった。ハーディネスを喚起させるための内言尺度などの質問紙や，今までの人生での困難な出来事とその対処方法を自由記述してもらった。研究Ⅰでは，得られた実体験データを葛藤状況と対処方法に分類し，ハーディネスを喚起させる内言との関連を検討した。研究Ⅱでは，計量テキスト分析を用いて，現代の女子学生が葛藤状況にどのように対処しているかを詳細に検討した。

研究Ⅰから以下のことが明らかとなった。

1. 現代の女子大生は「学業」や「対人関係」に躓いた経験のあるものが多い。しかし、「異性関係」に躓いた経験のあるものは少ない。
2. 現代の女子大生は，何らかの問題に躓いた際にも「自らの努力」や「他者への相談」などによって問題を積極的に解決しようとする力強さを持っている。
3. 「自己への信頼感」セルフメッセージを用いる者は，「他者への相談」という対処行動を起こしやすい。逆に，「ひたむきさ」セルフメッセージを用いる者は，「他者への相談」対処行動を起こさない。

研究Ⅱからは以下のことが明らかとなった。

1. 解決済群では，忘却という対処行動は独立性が高かった。このことから，忘却という

対処行動には、他の対処行動とは違う特性効果が示唆された。

**論文題目：適応指導教室の心理的機能に関する研究**

—通室生徒に対するインタビューを通して—

**氏名：**下村 麻衣

**概要**

本研究の目的は、適応指導教室にどのような心理的機能があるのかを明らかにすることであった。そこで、現在適応指導教室に通室している生徒5名を対象に半構造化面接を実施し、その逐語データを修正版グランデッド・セオリー・アプローチを用いて分析・検討を行った。

その結果、28の概念、9の下位カテゴリーおよび4の上位カテゴリーが生成された。このことから、適応指導教室には【学業への不安・焦りの低減】【通室に対するネガティブな感情の緩和】【学校復帰ステップ】という機能があることが明らかになった。通室生徒は不登校であることから、学業への不安を持っている。そこで、適応指導教室に通い学習の習慣づけを行うことで、【学業への不安・焦りの低減】をすることができる。また、通室生徒は対人関係を主とした学校でのトラブルを多く経験している。そこで、適応指導教室で良好な対人関係を形成したり、SSTやグループワーク等の活動から多様なスキルを獲得することで、【対人関係安定化の促進】を図っている。一方で、通室生徒は<通室への不安>を感じている。しかし、実際に通室を続け<居場所感の感受>を通して【通室に対するネガティブな感情の緩和】が図られている。通室生徒は適応指導教室を学校に戻るためのステップや、高校に行くための練習だと考え、<学校復帰のための準備>をすることができる。このことから、適応指導教室の利用は生徒にとって【学校復帰ステップ】につながる。

以上の4つの機能が不登校生徒の支援に役立っていることが示唆さ

**論文題目：東日本大震災を契機に転居した母親のストレス**

—福島県の被災者を対象として—

**氏名：**鈴木優里香

**概要**

平成23年3月11日、三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の地震発生から始まる東日本大震災が発生した。これまで東日本大震災に関する様々な研究が行われてきたが、対象の多くは老人や子どもが目立ち、子育て中の母親を対象としたものや自主的に一般住宅に転居した人の調査は追跡が困難なこともあり少ない。そこで本研究では福島県で被災し震災を契機に一般住宅に転居した母親4名（平均年齢35.3歳）を対象にインタビューを行

い、母親自身や子育てにかかわるストレスについて明らかにすることを目的とした。分析には、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach : M-GTA) を用い、50個の概念と23のカテゴリーを生成した。震災を通じた母親のストレスとしては、転居による物理的变化や子育てストレスなど多岐にわたることが示された。また、震災を通じた母親自身の心境の変化には心理的不安定の者がいる一方で、前向きな気持ちの者、変化なしの者もいた。また、母親たちは転居先で受けた子育て支援 (子ども親子遊びや子育て支援センターの利用等) や地域からの支援 (地域の人から生活必需品をもらう等) が複数あったことが示された。震災が5年経った現在、母親たちは、公的な支援が打ち切られる不安を感じていた。被災者に対する今後の支援の在り方は継続して重要な課題と言える。

**論文題目：**中学校における修学旅行体験が学校適応感および共同体感覚に与える影響

**氏名：**高橋 美久

## **概 要**

本研究では、中学校における修学旅行体験が学校適応感、共同体感覚および状態自尊感情に与える影響を検討することを目的とした。調査対象として、関東県内の公立A中学校の中学3年生349名を対象に、質問紙による調査を実施した。

研究1において、現在の中学生の学校適応感、共同体感覚および状態自尊感情の実態を把握するために、男女別に平均値の差の検定を行った。その結果、共同体感覚の下位尺度である「自己受容」と「状態自尊感情」において男女差が確認され、男子は女子より「自己受容」と「状態自尊感情」が高いことが示された。さらに、学校適応感、共同体感覚および状態自尊感情の関連を検討するため、共分散構造分析を行った。その結果、状態自尊感情が高いほど、共同体感覚が高まり、学校適応感が向上するというモデルが得られた。

研究2において、修学旅行前と修学旅行後で学校適応感、共同体感覚および状態自尊感情にどのような変化があったのかを検討するために、学校適応感、共同体感覚および状態自尊感情の性別・時期による2要因の分散分析を行った。その結果、すべての尺度において、修学旅行後が修学旅行前よりも得点が有意に高かった。

以上から、事前学習、修学旅行、事後学習という一連の活動により、学校適応感や共同体感覚および状態自尊感情のすべてが高まることが明らかとなり、修学旅行の効果が示されたといえる。

**論文題目：**ソーシャルネットワーキングサービス（SNS）と食行動およびボディイメージとの関連についての研究

—女性摂食障害患者と女子大学生の比較検討を通じて—

**氏名：**橋本 聖子

**概要**

摂食障害はやせを礼賛するマスメディアの影響が大きいと言われている。近年のソーシャルネットワーキングサービス（SNS）の流行は、摂食障害の新たな要因になる可能性があると考えられる。本研究では、SNSと食行動異常やボディイメージとの関連を調べる。調査対象は、摂食障害患者42名（患者群）および、一般女子大学生143名（一般群）であり、質問紙調査を行った。内容は（1）フェイスシート（年齢、身長・体重、SNS利用状況）（2）やせに対するメディアの影響尺度、（3）EAT-26（Eating Attitude Test-26）、（4）日本語版RSES（Rosenberg Self Esteem Scale）、（5）Japanese Body Silhouette Scale type-Iである。t検定の結果、SNSの利用、頻度において、女子大学生の方が有意に高かった。次に患者群、女子大学生群をそれぞれ、自分の体型についてどう認知しているかによって3群（自分を太っていると認知している群、中間群、自分をやせていると認知している群）に分けた。そして、一元配置の分散分析の結果、患者群の自分をより太っていると認知している群はダイエットの項目の得点が有意に高く、またブログの利用得点が高かった。t検定の結果、患者群の選択した他者のシルエットは有意に実際より太っていた。以上のことから、女子大学生の方がSNSを利用したり、SNSの写真をコーディネートに参考にしていて、利用時間も長いことが明らかになった。患者群の自分を太っていると認知している群では、ダイエットに関心があり、SNSではブログをより使っていた。一方、一般群で自分のことをやせていると認知している群は、ブログをより使っていなかった。患者群と一般群を比較すると、他人の体型もより太って認知していた。今後、本研究は治療者の声を、SNSで発信したり、体型認知の障害に対する心理教育をするという点で、役に立つと考えられる。

**論文題目：**成人発達障害専門デイケア参加が成人発達障害患者に与える影響

**氏名：**藤田 七海

**概要**

発達障害のある子どもの増加とともに、近年成人期における発達障害に対する認知が高まっている。支援法の一つとして、現在日本では医療機関にて成人期発達障害専門プログラムを用いたデイケアが行なわれているところもあるが、未だ数は少ない。本研究では、インタビューを通じて成人発達障害専門プログラムの効果を探り、より洗練されたプログラムに向けての一助となることを目的とする。自閉症スペクトラム障害と診断を受けており、成人発達障害専門プログラムを施行しているデイケアに参加した経験のある成人

患者4名に半構造化面接を実施し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach : M-GTA) を用いて分析した。その結果、21個の概念が成立し7個のカテゴリーが生成された。対象者は発達障害の特性によって、コミュニケーションの立ち行かなさなど、日常生活に支障をきたしており受診のきっかけに繋がっている。過去の悩みを踏まえ、デイケアに期待したこととして、対人スキルを学びたいことがあげられた。デイケアを通じて、参加メンバーとの関わりで新たな気づきを得たことにより、発達障害に関する情報不足による不安の軽減がなされたことや、感情コントロールについての練習を行ったことによって、感情の安定化に繋がっている。また、デイケアに参加し、メンバーやスタッフとの関わりを得たことにより、他者の気持ちの理解促進が行なわれた。一方で他メンバーとの話し合いをもっとしたかったとの意見もあげられた。全体として今後の生活に前向きな考えになる等の変化が見られ、プログラムの有効性が示された。

**論文題目：**現代の学生における潜在的キャリア意識に関する研究

—人生課題（結婚と育児）を背景とした性差を中心—to

**氏名：**吉山ちひろ

**概要**

本研究では、男性と女性のワーク・ライフ・バランスにおける家事や育児に対する意識を調査し、男性と女性の間の潜在的なギャップについて比較検討を目的とした。調査対象者は、関東圏内のA大学の学部生男子93名、女子41名と、関東圏内のB女子大学の学部生140名である。それぞれに家事（子ども無し）、育児（子ども有り）をそれぞれ想定した2種類の刺激文を提示し、刺激文に続く物語を作成してもらった。研究Ⅰでは、作成された物語を結末別に分類し、現代の男子学生と女子学生のワーク・ライフ・バランス意識の差を検討した。研究Ⅱでは、現代の男子学生と女子学生の深層イメージを抽出し、検討した。これらの研究から、以下の事が明らかとなった。

1. 男子学生は子どもの有無に関係なく、家事を手伝う結末を選んだ者が半数以上に上った。女子学生も子どもの有無に関係なく、夫と話し合う結末を選んだ者が半数以上に上った。
2. 男子学生は「妻の感情を理解しながらも、妻に言われないと手伝えない」、または「紆余曲折がないと手伝えない」ということが見て取れた。女子学生はまた、自分の夫になる人は妻ばかりが家事をしていることについて謝罪する優しさがあるというイメージを持っていた。本来の家庭経営の観念から言えば、共働きであれば分担は当然のことである。これは男子学生、女子学生共に「家庭経営」の概念が薄いため、このようなイメージになっているのではないだろうか。